槐（かい）

岡井省二創刊

平成29年4月号

平成二十九年四月一日発行　第二十七種郵便物　通巻第三二〇号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

狐火

高橋将夫

動くのは雲の彩のみ雪の原

見えすぎて迷つてしまふ雪野かな

人情は雪の深さに比例せり

往年の母の輝き針供養

PDF= 俳誌の salon

美しき氷の城は入れない

ぬくぬくと聞く寒柝の響きかな

絨毯に乗せて時空をひきずりぬ

猟師来て山も人の世となりぬ

浮寝鳥水底のこと見逃さず

足跡を残し狐火去りにけり

混沌はやがて秩序へ鴨の陣

PDF= 俳誌の salon

槐安集

水野恒彦

海鳴りに鮫は置かれしまま渇く
風花や触れたるものの彩に消え
枯野原夢売る男遂に去る
綿虫や空の南は翳りける
火の山の記憶ひそかに露氷る

加藤みき

冬の日やしつかり畳む洗濯物
ラガーマンに追ひ越されたり風生るる
春浅しベッドの上で散髪す
暖かき雨になりたり半平太
砂浜に到り渦潮弧を描く

中島陽華

初松籟石のモアイが動き出す
かしがまし箪笥流れ火焔茸
火の鳥の糞を抱へて愛后梨
ももいろの小箱の入歯おらが春
事始刀自命名の筆を取り

竹内悦子

極月や海馬騒ぎて発熱す
点滴のいろは桃色節届く
除夜の鐘半ばでありし祈祷(いのり)かな
明け遣らぬ西方浄土寒満月
福笹を背負ひて億万長者かな

PDF=俳誌の salon

雨村敏子

神ム杉の闇明けてゆく初御空

水神の歯朶のちぢれも四日かな

御降りの槙を濡らして晴れ着にも

シリウスや乙矢はいつも懐に

寒蟬の耳にのこりし眠りかな

本多俊子

落葉降る一樹の思ひつきるまで

冬三日月夢のつづきを尋ねたし

枯蔓に風神遊ぶ夕日あり

雪嶺やあまたの神を懐に

笛の音の流るるやうに冬の虹

近藤喜子

書初めの筆先とどく海の底

己がたましひ捜しゐる雪女郎

寒の水のむや黒き血うすまりぬ

太古の命われも継ぐ四温かな

死に神の近寄れぬなり冬木の芽

瀬川公馨

初日の出縹の衣を脱ぎにけり

万雷の拍手受けたる冬の木木

濁手に画竜点晴お正月

ぬけぬけとひよんな処に花八ツ手

荒行の男往来寒牡丹

PDF= 俳誌の salon

久保東海司

室咲きや包み込んだる四方の闇
羽子の音聞かざる巷羽子日和
昼間より飲む酒美(うま)し初戎
見開きの句は筆で記す初日記
韻をなすごとく北風鳴りづめの宿

柳川晋

冬日和張りては緩む渡世かな
新成人の知らぬ阪神大震災
アナタタチガサキニココロシタイオマンテ
鮪しび鰭長(びんなが)めばち沖も晴
豆を撒くための人工知能かな

熊川暁子

冬の川月日流してをりにけり
山祇の黙示に滝の凍りけり
光年の闇よりの使者寒昴
若菜粥山河に雲の湧くごとし
逢ひに行き逢はずに帰る黄水仙

寺田すず江

目に見えて五官弛みし去年今年
初夢の星星めぐる列車かな
虚と実と入り交じりけり風花す
田平子や右脳左脳の動き初む
水仙の日射し斜めによぎりけり

PDF= 俳誌の salon

岩下芳子

舌出して人を見てゐる寒蜆

雪五尺天狗の鼻の折れにけり

立春の光集めしソーラーパネル

凍星の一つを手繰り寄せにけり

寒卵有精卵と書いてある

近藤紀子

柊の花ほどの戀もありしかな

春雷ややがて別るる子を膝に

一山に大般若経初観音

雪空のにはかに晴れし葬りかな

北帰行に親の心のほつかいろ

岩月優美子

歌留多取り古人（いにしえびと）と朋になる

寒に入る夜は獣の迫るごと

神霊も音も閉じ込め滝氷る

心底の惑ひを覚ます寒の水

日脚伸ぶ命の紐の緩みたり

竹中一花

弓始め風を突く矢は中空へ

野を過ぎてビルの間抜ける初景色

宿木の黒き鈍色春隣

ブツクカバー枕草子に初明り

ほほ悼えみの横たふ柩冬灯

PDF= 俳誌の salon

前田美恵子

滝凍つる神代の光封じ込め

残る鴨池の広さの余りある

春日受く薩摩切子の七色に

厳寒や旖羅一入の大理石

苦も厄も払ひ福笹背負ひけり

中田禎子

不死鳥の翳残りたる初御空

いざ旅へ二重丸つく初暦

ピーピーとリンリンコトコト初仕事

神殿の裏を叩くや残り福

福笹の緑ラッキーカラーかな

PDF= 俳誌の salon

槐市集

中　貞子

初明りして生駒山より天竺へ
正座して眺める窓の初景色
鴇いろのおほきなリボン風花す
菜の虫も殺さぬ顔や松の内
初箒妣にまかせて旅の空

中島昌子

御降りの光みるみる七色に
冬晴れや走り根岩を鷲掴み
存分に日を吸ひ細る懸大根
手繰り寄す母の面影毛糸玉
ふり向かぬ子を見送りぬ冬帽子

中谷富子

おーいお茶呼ぶ人も無し寒の入り
お降りの睫毛眉毛に消ゆる雪
空の青負けずに咲きし冬薔薇
カレーの香みんな大好き春隣
女正月過ぎて句作り念を入れ

中西厚子

猫愛でる声の上擦る女正月
冬の星可視光線の外にある
餌突く鳥を睨む猫凍つる
大晦日一年分の長さあり
杖と杖親子寄り添ひ冬ぬくし

PDF= 俳誌の salon

中堀倫子

マニキュアのおもしろなかば年始め
風の子やおむつはづせぬお正月
初春や両手に重き福袋
初日から苦手な仕事始めかな
我身冷ゆ春告草にいやされし

橋本順子

奥の宮に火の灯りける初景色
丁寧な御辞儀を返す松の内
大寒や楔打ちたる梁前
白鳥の羽搏きの胸立ち上がる
落されし氷柱鋼の音立てり

平野多聞

初夢や地獄の沙汰を聞き洩らし
狐火を幾つあつめて桜島
任せよと印相光る初暦
雪中花雪の白さにまさりけり
馬齢かく重ねて喜寿の大旦

藤田美耶子

草ぐさの露に映りし初旭
上賀茂の炭で温くめし笙の笛
幸せを問はれてをりぬ冬すみれ
水仙の香の深沈と石仏
冬萌や明日の我へ背中押す

柳橋繁子

短冊の裏は松島古暦
精霊しんと明るさの裸木よ
大寒や五重塔の心柱
亀甲のブックカバーを受験の子
一月の旗振山や稚児走る

安野眞澄

初富士を仰ぎて威儀を正しゆうす
大津絵も飛び出て来たり河豚汁
秘めし朱一途なりけり冬牡丹
雪積むや猫にもらひし大欠伸
冬萌やわが行く道は牛歩たり

PDF=俳誌の salon

槐集

御降や松葉一本づつ光る　枚方　橋本　順子

紅梅の幹の水脈あかあかと
底冷えの中に常世の火を灯す
シリウスの雫子馬の額に落つ
海底の海鼠に星座巡りける
新しき生命抱きしめ初景色　大阪　江島　照美

本能も野生もなくし人の日よ
侘助や余命を知りて生くる人
美しく恐ろしきもの雪積る
水餅や息合はぬまま偕老に
初星や明日のわれを信じやる　有松　洋子

窓の犬星の凍てゆく音聴くや
凩や夜空罅割れしてをりぬ
人も山も背を丸くせり村に雪
蠟梅や魂魄の影うすく置き

高橋将夫選

ころすなかれ鐘リンドンと聖夜かな　竹原　久保　夢女

プライドを天麩羅にして十二月
寒風に蚤の心臓晒しけり
話し上手夕べの雨は雪になり
猫の子は猫で決まりで初春で
初手水ぽとりぽとりと平和の輪　枚方　高野　昌代

齢八十苦楽を舐めて去年今年
寒満月透（関白道長）かさるる心に翳りなし
春寒の仕草も多し豆腐売り
大年をピンクに落とす砂時計
未来へと思ひふくるる初茜　大阪　藤田美耶子

冬木立振れて大空遠ざかる
仲良きはほど良き距離の冬の鳥
初場所の我にも欲しや力水
人の世の祈り重たし冬北斗

PDF= 俳誌の salon

銀河往来

◆槐集観照

高橋将夫

御降や松葉一本づつ光る　橋本　順子

正月の雨に松葉が光っているという美しい景。めでたい。写生句にもこんない句があるのだ。

〈底冷えの中に常世の火を灯す〉の句は常世に注目したい。この冷え込みは自分の身辺だけでなく、世の中全体に広がる。それだけに灯火があたたかい。救いがある。

〈シリウスの雫子馬の額に落つ〉と〈海底の海鼠に星座巡りける〉の句の「子馬の額に落ちるシリウスの雫」と〈海底の海鼠に星座が巡る」という発想は実に新鮮に感じられた。嫌味がなくて、素直に感心させられる句だと思う。

侘助や余命を知りて生くる人　江島　照美

自分の余命を知ることができたら、老後の設計が立て易くなる。しかし、あと何年と宣告されるのは恐いことでもある。知らない方がいいのかもしれない。掲句では「余命を知りて生きる人」だが、心は侘助のように穏やかなのだろうと拝察した。〈美しく恐ろしきもの雪積る〉の句、確かに雪は美しいが、恐いものであり、汚いものでもある。

〈水餅や息合はぬまま偕老に〉と〈本能も野生もなくし人の日よ〉の句は、なかなかシニカルで本質を突いている。〈新しき命抱きしめ初景色〉の句は命の賛歌。

蠟梅や魂魄の影うすく置き　有松　洋子

蠟梅の一部が陰っている。それを魂魂の影と見た精神の風景。〈凧や夜空罅割れしてをりぬ〉の句の「夜空罅割れ」や〈窓の犬星の凍てゆく音聴くや〉の句の「星の凍てゆく音を聴く犬」はいかにも作者らしい感性。〈初星や明日のわれを信じやる〉は星に祈る作者の姿。

プライドを天麩羅にして十二月　久保　夢女

プライドなんか天麩羅のように揚げてしまえ、という発想に脱帽。でも、流石に捨ててはいないのだ。

〈ころすなかれ鐘リンドンと聖夜かな〉の「ころすなかれ」がモーゼの十戒を想起させる。

〈寒風に蚤の心臓晒しけり〉の句、「蚤の心臓」ならこのような句はとても詠めない。〈話し上手夕べの雨は雪になり〉の句、ように雨から雪に移り変わったような、立て板に水の上手な話しぶりなのだ。〈猫の子は猫で決まりで初春で〉は吹っ切れの一句。

初手水ぽとりぽとりと平和の輪　高野　昌代

手から滴った初手水の水が水輪を作り、それが幾重にも広がってゆく。そんなふうに平和の輪も広がってほしいものだ。〈大年をピンクに落とす砂時計〉の句、砂時計のピンクの砂が大年の時を刻んでいる。砂時計のピンクの砂が大年という季語の本情に新鮮さを加えた。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon